

表現過程における相互交流の効果

— 説明的文章を題材として —

金子淳嗣

I 研究の目的

実践を重ねるうちに、作文指導に対して、二つの問題意識をもつようになった。一つは表現過程にかかわることであり、もう一つは文種にかかわることである。

表現過程において問題となるのは、一度書いた文章をどのように書き直すかということである。書くことは、本来個人内の活動であり、これは推敲の過程においても例外ではない。しかし、書いた文章をすぐに個人の読みだけで直すことには限界がある。それは、書いたものにとらわれ、客観的に評価したり内容を吟味したりすることが難しいからである。したがって、実際には、一定の期間を置いて読み返すという方法以外に、内容に関する推敲はあまり期待できない。そこで、複数の読み手の存在が必要になる。個人の推敲を充実させるような交流の場が求められるのである。

文種にかかわる問題としては、今までの指導が、心情を描くような文章に偏っていたことが挙げられる。このような文章を

書かせることも大切であるが、情報化、国際化社会に対応する力を育てるには、実用的な機能をもつ説明的文章を書く活動を積極的に取り入れていかなければならない。特に、知識や情報を相手に分かりやすく伝えることを目的とする説明文は重視される必要がある。

このような問題意識を受け、推敲の過程における相互交流に注目する。身近な読み手の反応は、書き手に相手意識を強くもたせることに働く。また、友達の文章を読み、感想や意見を述べることは、読み手にとって、よりよい表現に気付く機会となる。相互交流で大切なのは、どのような層の子どもでグループを組むかということである。しかし、今までは、グループの活動自体に目を奪われ、組み方に対してはあまり注意が払われてこなかった。したがって、グループの組み方による効果の違いについても明らかにしたいのが現状である。

これらのことを踏まえ、説明的文章の表現過程に相互交流を取り入れた授業を構想する。本研究の目的は、授業実践の分析を通して、表現過程における相互交流の効果を実証的に明らかにすることである。

II 実践の構想

実施期日 平成十年九月七日から九月三十日まで
対象学級 新潟県の公立小学校

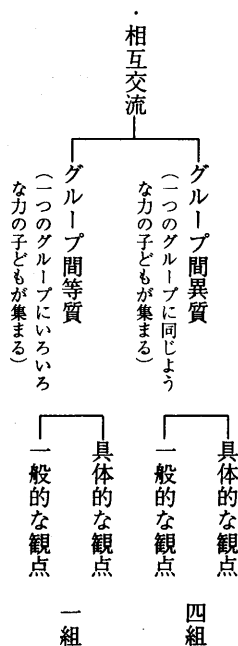
六年一組 (三十一名)
六年二組 (三十二名)
六年四組 (三十二名)
授業者 学級担任

一 目的

相互交流を行うときに、考えなければならぬことが二つある。一つはグループ分けのことであり、もう一つは相互交流を行う際の観点のことである。今までの実践では、グループの組み方や構成が問題にされることはあまりなかった。どのような観点を設定すればよいかということについても十分に論じられてきたとはいえない。

そこで本実践においては、四組をグループ間が異質になるように、一組をグループ間が等質になるように分ける。そして、各組のそれぞれのグループにおいて、相互交流がどのような働きをするか明らかにしていく。また、相互交流の観点については、具体的なものと一般的なものとを設定し、各組の半分ずつに提示する。そして、交流の様子や、下書きと二回目の記述との比較から、それぞれの観点の効果を明らかにしていく。

二 相互交流の在り方



三 題材

体の中における水の働きを分かりやすく説明する。

四 相互交流の観点

① 具体的な観点

「体の中における水の働きを説明する」という課題のもと、提示する資料の内容も考慮し、次の七つを設定する。

- ・体の中における水の働きが二つ以上書かれているか。
- ・体の中における水の働きについて具体的な説明があるか。
- ・働きごとにまとめて書かれているか。
- ・言葉の使い方におかしなところはないか。
- ・途中で言っていることが変わっていないか。
- ・水を飲む理由と体の中における水の働きに関係ないことが書かれていないか。
- ・最後にまとめが書かれているか。

② 一般的な観点

教科書の作文単元に見られる説明的文章を見直す観点を参考

にし、題材も考慮した上で、次の四つを設定する。

- ・体の中における水の働きについて分かりやすく書かれているか。
- ・体の中における水の働きについて詳しく書かれているか。
- ・分かりにくいところはないか。
- ・もつと詳しく書いた方がよいところはないか。

五 授業後の聞き取り調査

① 抽出児

学級担任の協力を得て、一組と四組とから六名ずつの抽出児を選定する。その際、次のような手続きをとる。

- ・下書きの量と質とを分析し、その結果を基に、学級を上位、中位、下位のグループに分ける。
- ・学級担任の評価も加え、上記のグループの中から、上位二名、中位二名、下位二名を選定する。

② 聞き取り調査の内容

相互交流と二回目の記述とのかかわりに焦点を当て、次のような内容について聞き取り調査を行う。

- ・相互交流のどのような意見が参考になったか。
- ・相互交流のどのような観点が参考になったか。
- ・友達の作文は、二回目の記述の参考になったか。
- ・二回目の記述において、どうして書き直したのか。
- ・二回目の記述において、どうして書き直さなかったのか。

六 分析の方法

① 分析の資料

次の資料を基に、分析を行う。

・下書き

・二回目の記述

・相互交流の録音テープ

・相互交流の録画テープ

・抽出児の観察記録

・授業後の聞き取り調査

② 分析の内容

相互交流のあるなし、グループの組み方、提示する観点が産出文の質にどのような影響を及ぼすかを分析する。

- ・相互交流のあるなしが産出文の質に及ぼす影響
- ・グループの組み方の違いが産出文の質に及ぼす影響
- ・提示する観点の違いが産出文の質に及ぼす影響

七 分析の項目

説明的文章の特性や題材と照らし合わせ、質的な分析のために、次の項目を設定する。

- ① 体温の調節が書かれている。
- ② 体温の調節についての具体的な説明が書かれている。
- ③ 栄養分や不要物の運搬が書かれている。
- ④ 栄養分や不要物の運搬についての具体的な説明が書かれている。

これらの項目を基に、子どもが書いた下書きと二回目の記述とを三段階（A、B、C）に分けて評定する。それぞれの項目における判定基準は、次のとおりである。なお、②の項目において、体温調節のために大切な役割を果たすものとして、「体の中にある水分」と「体から蒸発する水分」とを挙げたのは、

提示した資料から子どもが読み取ることを期待したからである。また、④の項目において、「水にはものを溶かし運ぶ働きがあること」と「水分の多くは血液に含まれていること」とを取り上げたのも同様の理由による。

① A判定…体温の調節が書かれている。

B判定…体温の調節について明示されていないが、そのことが読みとれる。

C判定…体温の調節が書かれていない。

② A判定…体温の調節のために、次の二つが大切な役割を果たしていることが書かれている。

・体の中にある水分

・体から蒸発する水分

B判定…A判定にある二つの事柄のうち、どちらか一方が書かれている。

C判定…A判定にある二つの事柄のどちらも書かれていない。

③ A判定…栄養分と不要物の運搬が書かれている。

B判定…栄養分と不要物のどちらか一方の運搬が書かれている。

C判定…栄養分と不要物のどちらの運搬も書かれていない。

④ A判定…栄養分と不要物の運搬のために、次の二つが大切であることが書かれている。

・水にはものを溶かし運ぶ働きがあること。

・水分の多くは血液に含まれていること。

B判定…A判定にある二つの事柄のうち、どちらか一方が書かれている。

C判定…A判定にある二つの事柄のどちらも書かれていない。

検定は二名で行う。項目別に二名の判定がどれくらいの割合で一致しているかを求め、異なる判定については話し合う。

Ⅲ 実践の概要

授業は三時間で行った。各時間の概要は、次のとおりである。
〔第一時〕

一、二、四組共通の学習活動。まず、学級全体に、人間が生きていくために必要なものは何かと問い掛けた。子どもからは、「食べ物」「睡眠」「水」などが挙げられた。その中で、水を取り上げ、なぜ人間は水を飲むのかについて考えさせた。子どもは、水を飲む理由として、「のどが渇くから」を挙げ、特に運動をして汗をかくと水が飲みたくなるという感想を述べた。その後、飲んだ水は、人間の体の中でどんな働きをするかと問い掛けたが、はっきりした答えは返ってこなかった。

そこで、資料を基に体の中の水の働きについて調べることにした。また、調べたことを説明する文章を書くことを告げ、資料の大事なところに線を引くよう指示した。子どもは、三十分ほど時間をかけ、資料を読み進めた。

〔第二時〕

一、二、四組共通の学習活動。下書きを書くにあたり、次の

ように働き掛け、書く文章の内容を確認した。

「私たちが生きるためには水が必要ですよ。私たちは、毎日水を飲んでいきます。自分の生活を思い出してみてください。昨日いっぱい水を飲んだからといって、今日飲まなくてよいというものではありません。それは、飲んだ水が生きたために使われているからです。生きるためになぜ水はなくてはならないのでしょうか。また、体の中で、どんな働きをしているのでしょうか。体の中における水の働きの例をいくつか挙げ、それらについて具体的に説明する文章を書きましょう。」

子どもは、資料を基に、四十分ほど時間をかけ下書きを書いた。分量に違いはあるが、全員が書き上げた。

〈第三時〉

二組は、個人内の作業として、下書きの推敲を行った。時間は二十分ほどとった。

一、四組は共通の学習活動である。本時の前に、下書きを基にグループ編成を済ませておいた。また、下書きを印刷し、グループの人数分用意しておいた。

本時では、まず、下書きを基にグループで読み合うことを伝え、活動の手順を示した。

① 一人の文章を読む。(印刷して綴じてある順)

② 工夫したところを書き手が説明する。

③ 説明を聞いた後、聞き手が感想や意見を述べる。

次に、具体的な観点と一般的な観点が書かれた用紙を半分ずつのグループに配布した。全員の手元に用紙が行き渡ったこと

を確認し、感想や意見を述べるときの参考にするよう話した。

その後、司会を決め、読み合い活動に入った。はじめのうちは多少とまどいも見られたが、すぐに慣れ、手順にそって話し合いを進めていった。

すべてのグループの読み合い活動が終わった後、原稿用紙を配布し、下書きの書き直しをさせた。二組同様、書き直しの時間として、二十分ほどとった。

IV 実践の考察

一、四組の子どもにとって、文章を書き直す前に相互交流を行うという学習は初めての経験であった。授業後の聞き取り調査では、「感想や意見を言うのが楽しかった」「友達の文章を読んで、自分の文章との違いが分かった」「もつといろんな友達の文章も読んでみたい」という意見が聞かれ、相互交流は、子どもから見ても好ましい学習であったことが分かる。また、全体の印象として、一組と四組との間に雰囲気の違いは感じられなかった。二つの組のどのグループも、司会を中心として、真剣に、時には笑顔も見せながら交流を進めていた。グループ間が異質であれ、等質であれ、相互交流に臨む子どもたちの様子に大きな違いはない。

このように見た目には同じ相互交流であるが、実際には、子どもにどのような影響を及ぼしているのであろうか。典型的な事例を基に考察を加えていく。

一 グループ間異質における典型的な事例

ここでは四つの事例を取り上げる。

【事例一】具体的な観点を提示したグループにおける上位の子

どもの場合

児童①は、下書きを書くにあたり、次のことに気を付けている。

C① 具体的な例を挙げて、最後にまとめて書けたらいいなあと思って思いました。のどが渴いたときに飲む水の役割とか、体にとつての水の働きとか、具体的に。

この言葉のとおり、下書きには、のどが渴いたときに飲む水の役割や体にとつての水の働きが書かれている。「はじめ」と「まとめ」にあたる部分もあり、構成を意識した下書きになっている。この下書きについて、児童①は、分かりやすく書けたという手応えを感じている。また、いつものように自分だけで読み返したとしたら、それほど変わらなかつただろうとも述べている。

しかし、相互交流を行うことによつて、内容に大きな変化が起こる。書き直しの一つは、水の働きの例が増え、具体的な説明が加わっていることである。

〔下書き〕

次に、体にとつての水のはたらきです。水は体の中をぐるぐる回りながら、各細胞に栄養分と酸素をわたし、いらなくなつた物を受け取って捨てる働きがあります。そして、もう一つは体温の調節をすることです。体に六十%以上の水があるということは、体の外の気温の変化に対して、体温の変化

は少ないということになります。

〈二回目の記述〉

次に体にとつての水の働きです。一つめは、体の中をぐるぐる回りながら、各細胞に栄養分と酸素をわたし、いらなくなつた物を受け取って捨てることです。これは血液によって行われますが、血液の九十%以上が水分なのです。血液中の水分が少なくなると、血がこくなり、血管を流れにくくなつてしまいます。二つめの働きは、体温の調節をすることです。水はあたたまりやすく、さめにくい性質をもっています。人間の体には六十%以上の水があります。だから、体の外の気温の変化に対して、体温の変化が少なくてすむのです。また、体の表面から出ていく水も体温調節に大きな役割を果たしています。三つめの働きは、水分の調節をすることです。体の中には不必要な物質もあります。その不必要な物質は体の外に出されなければなりません。尿として出された水分を補うために使われるのです。この三つの働きは、とても大切です。水の働きの一つ目は、栄養分や不要物を運搬することである。これについては、水分が多く含まれる血液によつて行われるという情報が付け加えられている。また、働きの二つ目については、温まりやすく冷めにくいという水の性質についての説明が加わり、体から蒸発する水の役割についてもふれられている。そして、三つ目の働きとして、新たに水分の調節が取り上げられている。これらの書き直しについて、児童①は、次のように説明する。

C① 観点に「二つ以上書かれている」って書いてあつた

し、これは水の働きについての作文だから、例が多い方が分かりやすいかなって思つて、水分の調節を書きました。それに、「具体的な説明があるか」のところ、話し合いのときに、Yさんに水のまじやないんだよね、不思議だよねって言われたから、そういえば血液だなんて。それと、何で水分が六十%以上あると体温の変化が少ないのってSさんに言つてもらつて、温まりやすく、冷めにくい水の性質を説明しないと分からないかなあつて思つたから、書きました。

「体の中における水の働きが二つ以上書かれてゐるか」「体の中における水の働きについて具体的な説明があるか」という観点と友達の見解とを基に、書き直しを行つてゐるのである。また、体から蒸発する水の役割については、友達の記事に書いてあり、それを参考にすると答えてゐる。

水の働きのほかには、最後のまとめの部分を書き直してゐる。その部分に関する下書きと二回目の記述とは、次のとおりである。これを見ると、先ほどの例とは異なり、二回目の記述が簡潔になつてゐることが分かる。余計なものを削ることによつて、分かりやすさを出してゐるのである。

《下書き》

このように、わたしたちの体は水でできてゐます。水をのまないといふと、脱水症状が起きて、数日から一週間くらいで死んでしまふからです。

だから、わたしたちにとつて、水はとても大切な存在なのです。地球に住むすべての生物にとつて大切な水をこれから

も大事にしましょう。

《二回目の記述》

人間は、水を飲まないと、脱水症状が起きて、数日から一週間くらいで死んでしまふのです。水はわたしたち人間にとつて、それだけ大切な存在なのです。

二回目の記述では、「地球に住むすべての生物にとつて大切な水をこれからも大事にしましょう」が削られてゐる。なぜ、このように書き直したのであろうか。そのことについて、児童①は言う。

① C

最後があんまりいらなくなつて。観点の「関係ないことが書かれてゐないか」を見て、そう思つたら、YさんがO君に、最後のところ変えた方がいいんじゃないかといつて言つていたから。直接言われたわけじゃないけど、それを聞いて私も変えた方がいいかなつて思つて。あんまり関係ないかもしれない、「水を大切にしましょう」とか言つて。これは水の働きの作文だから。

児童①は、「水を飲む理由と体の中における水の働きに関係ないことが書かれてゐないか」という観点を見て、まとめの部分に内容を合わないのではないかという思いをもつ。そして、そのような思いをもちながら、O君の下書きについての話し合いに臨む。O君の下書きのまとめは、「もし、水がなかったら、人間はいなくなるかもしれない。だから、僕たち人間は水を大切にしていきて、いつも元気に過ごせるようにがんばつていきていす」である。確かに、体における水の働きのまとめとして適切であるとはいえない。O君の下書きに対する友達の意見を

聞いて、児童①は自分の下書きを書き直す。友達同士のやりとりを参考にしている例である。

そのほか、下書きでは平仮名で書かれていたものが、二回目の記述では漢字に直されているところがある。児童①によれば、漢字や言葉の使い方などを直すというのが、今まで個人で行ってきた推敲のイメージであるという。今回の観点でいえば、「言葉の使い方におかしなところはないか」という見方をしてきたことになる。そのような個人で行う推敲と比較して、児童①は、次のような感想を述べる。

① 今日みたいにやった方が直しやすいし、意見とかも
らえれば、そうすればいいんだなって、すぐ加えられるから直しやすかった。書く順序とか、説明の仕方とか、そういうことについてもっと言ってもらえるとよ
かったかな。

友達の見えをもらうことで、児童①は、個人での推敲ではできなかつた内容面について的大幅な書き直しを行っている。下書きを基にした相互交流が、二回目の記述に有効に働いているのである。

また、書く順序や説明の仕方についても意見がほしかつたという感想を述べているが、これは相互交流の観点を設定する際の参考になるものである。多様な観点をより具体的な言葉で提示していく必要があるだろう。

【事例二】 具体的な観点を提示したグループにおける中位の子どもの場合

児童②は、次のことに気を付けて下書きを書いていた。

② 資料から余計なものについていうか、これだったら、水の働きを中心に書いて、それ以外のことはあんまり書かないようにしようと思った。でも、水の働きが思ったより書けなかつた。それと、読んでいる人に分かりやすいように、問い掛けるようにして書いた。問い掛けて答えを書けば、読んでいる人も楽しいかなって。

児童②の言う問い掛けは、「私は、体の中の水の働きについて、まず『水を飲まないで何日間生きていられるか』を調べてみました」の後に、「みなさんは何日間生きていられるかと思いませんか」という形で表されている。そして、その答えとして、「人は、何も食べなくても水があれば、二、三週間は生きられます。」と続く。このような問いと答えの書き方は、今まで学んできた説明文を参考にしたものであるという。

児童②は、下書きに二つのことを取り上げている。一つは、「水を飲まないで何日生きていられるか」であり、もう一つは「体にとつての水の働き」である。下書きでは、水の働きとして体温の調節だけを挙げているが、相互交流の後、次のように変化している。

〈下書き〉

次に、「体にとつての水の働き」について調べました。

水は「体温の調節」にとつて大切です。水にはあたたまりやすく、さめにくい性質があります。体内に水が多くあるということは、気温の変化に比べて、体温の変化が少ないということになります。

《二回目の記述》

次に、「体にとつての水の働き」について調べました。

水は「体温の調節」にとつて大切です。水にはあたたまりやすく、さめにくい性質があります。体内に水が多くあるということは、気温の変化に比べて、体温の変化は少ないということになります。それと、水には、ものを溶かし運ぶという働きがあります。体に必要なものを運び、体に必要ないものを運び出すという役目を果たしています。

二回目の記述で加わっているのは、「それと、水には、ものを溶かし運ぶという働きがあります。体に必要なものを運び、体に必要ないものを運び出すという役目を果たしています」の部分である。体温調節のほかに、なぜこの部分を付け加えたのか。そのことについて、児童②は、授業後、次のように述べている。

C② 観点に「働きが二つ以上書かれているか」とあつて、私は、体温調節だけ書いていたから、ほかにもあるかなと思っていたら、Sさんが、ものを溶かして運ぶということも書いてあつたよつて教えてくれて。それで、書き直す前に資料を見たら、大事だなと思つて、それで足しました。

児童②は、「体の中における水の働きが二つ以上書かれているか」という観点を見て、ほかにも働きがあることに気付く。この背景には、前述したように、下書きの段階では、水の働きを中心に書こうとしたがうまくいかなかったという思いがある。そこに、友達からの助言が重なり、ものを溶かして運ぶという

働きを書き加えたのである。

また、児童②は、「体にとつての水の働き」の後に、なぜ水を飲むのかという新たな内容を付け加えている。

《下書き》

……、体温の変化は少ないことになりました。

このように、水はとても大切なものなのです。

《二回目の記述》

…を運び、体に必要ないものを運び出すという役目を果たしています。

でも、なぜ水がほしくなるのでしょうか。運動などをして、汗をかいた後はとくにそうです。それは、私たち人間には、体の中の水分の割合を一定に保とうとする働きがあるからです。体から水分が失われると、のどがかわいて水を飲みなさいと知らせるのです。

このように、水はとても大切なものなのです。

この付け加えについては、次のように言う。

C② T君の作文に「なぜ人は水を飲むのでしょうか」って書いてあつたから、それを参考にさせてもらつて、「運動後はとくにそうです」って例を挙げて、あとT君のを少し工夫しながら自分で書き直して付け足しました。

児童②が参考にしたT君の下書きには、「みなさん、なぜ人は水を飲むのでしょうか。夏の暑い日はげいしい運動をしたときには、だれもが水を飲みたくなります。なぜでしょう。それは、ばくち人間の体が、体の中の水分をつねに体重の約三分の二という一定の量に保とうとするようにできているからです」で

ある。下書きの段階で、児童②の目は「水を飲まないで何日間生きていられるか」と「体にとっての水の働き」に向けられていた。それが、友達の下書きにふれることにより、水がほしくなる理由についても関心をもつようになる。

児童②は言う。

C② 水を飲まないで何日生きられるかと、水の働きはつながっているっていうのかな。特に体温の調節の方はそれができなければ死んでしまうから、それは水を飲まないと死んでしまうことと同じだと思って。同じことを二つ書いたから、今度は違う意味で、水がどうして飲みたくなるかなって思って、それを書くことになりました。それで、最後に「だから、水はとても大切なものです」が来るようになりました。

児童②は、「水を飲まないで何日生きていられるか」と「体にとっての水の働き」とを同じようなものとしてとらえている。そして、友達の下書きを参考に、「なぜ水がほしくなるのか」という新たな情報を書き加えているのである。

【事例三】具体的な観点を提示したグループにおける下位の子どもの場合

子どもの場合

第一時に授業者から出された、なぜ人間は水を飲むのかという問いに対して、児童③は、「水を飲まないで脱水症状になつて死ぬから」と答えている。授業後の聞き取り調査によれば、何かのテレビ番組で脱水症状のことを知ったという。また、資料を読んで分かったことや、それを基に下書きを書いたことに

ついて、次にように述べている。

C③ 資料で調べて、体の中の三分の二が水分だということとが初めて分かった。それと、体から寝るときも水分が出てることが分かった。それで、水のことについて多くのことを書こうと思った。水は、どういう働きをしているとか。

児童③が書いた下書きと二回目の記述とは、次のとおりである。下書きには、脱水症状のことや体における水分の割合のことなどが書かれている。相互交流後の二回目の記述を見ても、内容はほとんど変わっていない。

〈下書き〉

水は、人間にとってなくてはならないものだと思います。それは、水をのまないと脱水症状が起おき、数日で死んでしまいます。

あと水は一日にこまめにとつた方がいいと思います。なぜなら、小便は水分を外へ出してしまふからです。

ねているときも、体から水分は出ていきます。人間の体の三分の二は水分でできています。

あと水は、血のとおりをよくする働きもついています。だからこのような働きもついているので、一日こまめに水分をとつた方がいいと思うのです。

〈二回目の記述〉

水は、人間にとってなくてはならないものです。それは、水を飲まないと脱水症状が起き、数日で死んでしまいます。

水は一日にこまめに飲んだ方がいいです。なぜなら、小便

は水分を外に出してしまうからです。

寝ている間も体の中から水分は出ていきます。

人間の体の三分の二は、水分でできています。

あと水は、血の通りをよくする働きをもっています。

だから水は、このような働きをもっているのです、一日こまめに飲んだ方がいいのです。

相互交流の前後で内容はほとんど変わらないが、表記などの細かいところでは、いくつか変化が見られる。書き直すきっかけとなった友達の意見について、児童③は、次のように言う。

C③ 「働き」の「き」を抜かしていることとか、同じこととはくっつけて書いた方がいいんじゃないとか。それと、「こまめにとった方が」じゃよく分からないから、「こまめに飲んだ方が」に直した方がいいって言われたり。

表記については、「起おき」が「起き」に、「のまない」とが「飲まない」とに、「ねている」が「寝ている」に、「血のとおり」が「血の通り」に変わっている。これらは「働き」の「き」が抜けているという意見をもたらしたことをきっかけとして、自分で判断し書き直したものであるという。また、「同じことはくっつけて書いた方がいいんじゃないか」という意見は、下書きの第一文と第二文についてのものだったが、それを基に、二回目の記述では第三文と第四文ともつけて書いている。

そのほか、二回目の記述には、「思う」という表現が見られない。このことについて、児童③は言う。

C③ 「思う」じゃなくて、もっと言い切った方がいいっ

てA君に言われたし、みんなの作文にも「思う」って言う書き方はなかったから、そうなのかなって。どうすればいいのかって聞いたたら、「ならないものだと思えます」を「ならないものです」にするって教えてもらって。そっちの方が人に説明するみたいだから変えてみた。

この言葉から、友達の意見や下書きを参考にして書き直していることが分かる。個人で行う推敲と比べて、児童③は、次のように言う。

C③ 友達の作文を読んでから直した方がやりやすい。自分だとかおかしなところはなかなか見付けられないからやっぱり、友達に間違ったところを聞いたり、友達のを読んで、こう書いた方がいいなって。そういうひらめきとか、友達に聞いたりして書けるからいい。

また、下書きと二回目の記述とを比べて、次のような感想を述べている。

C③ 書き直した方が、友達とかに聞いてうまくいってるなって。話し合えば、ぼく自身はうまくいって思うし、今日は言葉の使い方も教えてもらったから満足。

推敲に対する児童③の関心は、言葉の使い方にある。一番参考になった意見は、漢字についてのものだったという感想も述べている。児童③にとつて、同じ層の集まりである今回のグループは話しやすい場であったといえる。授業後の感想だけでなく、交流の様子からも、表記に関することを中心とした活発なやりとりが伝わってくる。その基になっているのが、「言葉の

使い方におかしなところはないか」という観点である。そのほかの観点は、「最後にまとめが書かれているか」を除いて、あまり活用されていない。内容面に目を向けさせるには、更にかみ砕いた分かりやすい観点が必要であろう。

【事例四】一般的な観点を提示したグループにおける上位層の子どもの場合

児童④は、三つのことを取り上げている。一つ目は水の働きのことであり、二つ目は体の中にある水の量のことである。そして、三つ目は水を飲まない場合のことである。

一つ目の水の働きについて、下書きと二回目の記述とは、次のような違いが見られる。

〈下書き〉

体の中の水について、三つの点から説明しよう。

一つは、水はどのような働きをしているかだ。

水の働きには、二つあり、一つは、各細胞に栄養分と酸素をわたし、不要物を受け取って捨てることである。

もう一つは、体温の調節である。体の中に水分があるので、体温の変化が少ないのだ。

〈二回目の記述〉

体の中の水について、三つの点から説明しよう。

一つめは、水の働きについてのことである。人は酸素を吸っている。水分は、人が吸った酸素を各細胞に栄養分といっしょにわたし、不要物を受け取って捨てているのだ。ここで注意しておくが、人の体の中に水がそのままあるのではなく、

血液といっしょに混ざり、その働きをしているのである。

この部分について、児童④は、次のように言う。

C④ 書き直した方は、体温の調節はあまり出さなかった

んですね。それで、「ここで注意しておくが」を付けて

加えて、体の中の水の働きをもう少し詳しく説明しよう

と思って。これは、ほとんど友達の作文を参考にし

ました。Aさんのに「水分は水のまま体の中にあるの

ではなく」っていうのがあるから、それを参考にしま

した。

下書きには、二つの働きが書かれているが、二回目の記述では、そのうちの一つ、体温の調節が削られている。その分、栄養分や不要物を運ぶという働きが詳しく説明されている。このとき、「もっと詳しく書いた方がよいところはなにか」という一般的な観点が頭にあつたという。その観点と友達の下書きとを参考にし、書き直しているのである。「体の中における水の働きが二つ以上書かれているか」「体の中における水の働きについて具体的な説明があるか」といった具体的な観点があれば、違った結果になっていたことも考えられる。

二つ目の体の中にある水の量については、次のとおりである。

〈下書き〉

二つ目は、体の中にもどの位の水があるかだ。水は成分のうちで一番多く、体重の約三分の二は水だ。

体の中の水分は、赤ちゃんが一番多く、老人が一番少ないのである。

二回目の記述

二つ目は、体の中に水がどれくらいあるかだ。

人の体重の三分の二は水分で、赤ちゃんのときが多く、年をとるにつれて、だんだん減っていくのだ。

内容はほぼ同じであるが、書き表し方が変わっている。二回目の記述では「年をとるにつれて、だんだん減っていくのだ」になっているが、このようにした方が途中の変化が分かると考え、書き直したとことである。

三つ目の水を飲まない場合のことについては、次のような変化が見られる。

〔下書き〕

三つ目は、水を飲まないとどうなるかだ。水を飲んでいたり、体はまだ水分がある時は大丈夫だが、水分が少なくなると脱水症状になる。心臓もショックを起こしストップしてしまう。もつとひどくなると、直腸の温度が上がり、その人は死亡してしまうのだ

〔二回目の記述〕

三つ目は、もし水を飲まないとどうなってしまうかだ。日に当たると汗が出るが、水分が少なくなりすぎると、脱水症状になり、全身がけいれんしてしまうのだ。もつとひどくなると、直腸の温度が上がり、四十三度以上になると死んでしまうのだ。

もう一つ、水分がなくなると、血がどろどろになってこくなり、一つ目で言った働きができなくなってしまうのだ。

二回目の記述には「もう一つ、水分がなくなると、血がどろどろになってこくなり、一つ目で言った働きができなくなってしまうのだ」

しまうのだ」が付け加えられている。「一つ目で言った働き」とは、栄養分や不要物を運ぶ働きのことである。

この部分について、児童④は言う。

C④

ここでですね。「もう一つ、水分がなくなると」のところ。これは、さつきも言ったんですけど、水の働きをちゃんと詳しく説明していなかったから、読み返してみたから、この説明が足りなかったから、もう少し詳しくしようかなあって思って、それで書き加えました。もちろん、自分で考えただけど、これもAさんの作文を参考にしました。

Aさんの下書きには、「たとえば、血液に水分がふくまれていなかったら、血がどろどろになり、血液がこくなりすぎて、血管を流れにくくなってしまいます」とある。水の働きについて詳しく説明したいという願いをもっていた児童④は、この下書きを読み、自分の作文に取り入れたのである。

このように児童④は、書き直す際に友達の下書きを参考にしているが、話し合いにおけるやりとりはどのように生かされたのであろうか。このことに関連して、児童④は、次のような感想を述べている。

C④

今日直したのは、友達の前文や意見を参考にしないで、それで、四つの観点だけ、それがあったんだけど、分かりやすいとか詳しいとかって人によって違うからよく分からないところがあるんですよ。だから、自由に意見が言えてよかったんですけど、もつと話しやすい観点があるといいんですよ。水の働きとか書き方

についての。それに、もつといろんな人の作文も読んでみたかったです。

児童④は、友達の意見を参考にしたと述べているが、相互交流の様子を見る限り、書き直しに結び付くようなやりとりがなされているとはいえない。それは、観点があいまいだからである。一般的な観点の場合、自由に意見が言えるという面はあるが、その分、的の絞りにくい話し合いになりがちである。そのような相互交流を経験し、児童④は、水の働きや書き方などについての観点が必要であると感じている。二回目の記述に生かせる意見が交わされる具体的な観点を望んでいるのである。

二 グループ間等質における典型的な事例

ここでは二つの事例を取り上げる。

【事例五】具体的な観点を提示したグループにおける上位の子

どもの場合

児童⑤は、個人で行う推敲と比較し、友達との読み合い活動のよさを次のように述べている。

C⑤ 自分が書いたものは、自分で直せるところは直せるけど、人から見てどうかは分からないから。自分でいいと思ったところでも、友達から見たら変かもしれないし、自分で変だと思うところも友達からはいいかもしれないから、そういうところは、読み合うといいと思います。友達の考えが分かるし。

このような期待感をもって相互交流に臨んだ児童⑤は、友達の下書きに対して積極的に感想や意見を述べている。例えば、

水の働きを一つしか書いていない友達に対して、「もう一つ書いた方が分かりやすくなるよ」という意見を述べているのである。また、言葉の使い方についても、「この字は漢字で書けるよ」とか「ここに点を入れた方が読みやすいよ」などの助言をしている。しかし、相互交流後の感想を見ると、児童⑤は物足りなさを感じていることが分かる。それは、次の言葉のとおり、自分の下書きに対して、期待したような意見がもらえなかったからである。

C⑤ 自分では、下書きを分かりやすく書くとは思っていただけ、そんなに分かりやすいとは思っていなくて。だけど、みんなが分かりやすいねって言ってくれたから、これでまあよかったのかなあって思いました。自信はなかったんだけど。だから、観点を見て、直せるところを直しました。

自信はなかったものの、友達に分かりやすいと言われた児童⑤は、観点と照らし合わせながら、自分の下書きを読み返している。そして、「体の中における水の働きについて具体的な説明があるか」という観点を基に、水の働きの一つである体温の調節について具体的な説明を加えている。その部分は、次のとおりである。

〈下書き〉

もう一つの働きは、体温の調節。水は温まりやすく冷めにくいという性質なので、体内に水が六十パーセント以上あるということは、体温の変化は少ないことになります。そればかりではなく、体の表面から蒸発する水も大切です。

《二回目の記述》

もう一つの働きは、体温の調節。水は温まりやすく冷めにくいという性質なので、体内に水が六十パーセント以上あるということは、体温の変化は少ないことになります。そればかりではなく、体の表面から蒸発する水も大切ですが、もし直達の体の表面からの蒸発がなかったら、体温が上がり続けて直腸の温度が四十度を越えようと、全身にシヨックが起こり、死んでしまうでしょう。

新たに加わっているのは、「もし私達の体の表面からの蒸発がなかったら、体温が上がり続けて直腸の温度が四十度を越えようと、全身にシヨックが起こり、死んでしまうでしょう」という一文である。この説明があることにより、蒸発する水が体にとってなぜ大切なかが分かる。

また、まとめの部分を変えている。

《下書き》

…をぐるぐる回ったり各所に栄養分や酸素を運んだり、不要物を運び出したりする重要な働きをしています。(前にも紹介しましたね。)

このように、水はとても大切な働きをしているのです。

《二回目の記述》

…をぐるぐる回ったり各所に栄養分や酸素を運んだり、不要物を運び出したりする重要な働きをしています。(前にも紹介しましたね。)

このように、人間にとって、水は生きていくためになくてはならないパートナーなのです。

これは、「最後にまとめが書かれているか」という観点を基に書き直したものである。この書き直しについて、児童⑤は言う。

C⑤

どうしようか迷ったんだけど、まとめのすぐ前に「重要な働きをしています」って書いたから、また「大切な働きをしているのです」だと同じようなことで、まとめにならないかなあって。それで、生きていく上でのパートナーということが浮かんだので、そう書きました。

このように、児童⑤は下書きを読み返し、気付いたところを直している。しかし、その書き直しは、相互交流で友達から得た情報や指摘によるものではなく、自分で具体的な観点を基に推敲した結果である。一つのグループを上位から下位の層の子どもで構成すると、グループ間を異質にした場合に比べ、伸びの幅は制限されるのである。

【事例六】具体的な観点を提示したグループにおける下位の子どもの場合

子どもの場合

第一時に、授業者から出された「普段どんなときに水が飲みたくなるか」という問いに対し、児童⑥は「おしっこをした後に飲みたくなる」と答えている。また、資料を読んだの感想を次のように述べている。

C⑥

分らないところとか、いろいろ分かったりして役立った。水を飲んで、いつまで生きていられるとかが初めて分かった。それと、口の中のにじみ出てくる唾

液や時々したくなるおしっこなども水でできているんだなど。それが初めて分かった。

次に示すのは、児童⑥の下書きと二回目の記述とであるが、初めて知ったことを中心に書いていることが分かる。

〔下書き〕

どうして、人間は、水をのむのかは、尿にあります。一つはあせをかき水をのみ体がひえてきて尿を出します。二つ目は、口の中に自然とにじみ出てくるだ液や、ときどきしたくなる尿など、どれも水分が出てきたものです。

人間は水におれいをいわなければいけません。それは、水のおかげで尿が出るからです。

もし、尿が出ない場合、病気になるかもしれないからです。ましてや、水をずっとのまないと脱水症状が起きて、数日から一週間くらいで死んでしまいます。だから水におれいをいわなければいけないのです。

だから、水は大切なのです。

〔二回目の記述〕

どうして、人間は、水を飲むのかは尿にあります。

一つは、汗をかき、水を飲み、体がひえてきて尿を出します。

二つ目は、口の中に、自然とにじみ出てくるだ液や、ときどきしたくなる尿など、どれも水分が出てきたものです。

人間は水におれいを言わなければいけません。それは、水のおかげで尿が出るからです。

もし、尿が出ない場合、病気になるかもしれないからです。

ましてや、水をずっと飲まないと脱水症状が起きて、数日から一週間くらいで死んでしまいます。だから水におれいを言わなければいけないのです。

だから、水は大切なのです。

下書きと二回目の記述とを比べると、「のむ」が「飲む」に、「あせ」が「汗」に、「いわなければ」が「言わなければ」に変わっている。また、二回目の記述では、第二文が改行してある。これらについて、児童⑥は言う。

C⑥

変えたところは、漢字で書いたところ。「のむ」と「あせ」は漢字で書けばいいよって言われて。それで「いう」も書けるから、それを直した。それから、行を変えてある。友達に行を変えてないよって言われたから、「一つは」のところをとなりの行に書いた。それと、もう一つ、「二つ目は」のところも変えた。

これは、中位の層の子どものからの指摘である。この指摘に対し、児童⑥は、「のむ」と「あせ」ってどういう字を書くんだっけ」と聞き返し、二回目の記述で漢字に書き直している。

聞き取り調査で、児童⑥が述べているのは、漢字と改行のことだけであるが、実際の交流では、友達から内容にかかわることについても言われている。例えば、次のような上位の子どものからの意見である。

尿のことを中心に書いてあって、おもしろいと思いました。どうして水を飲むのかっていうことが分かるし。あと、体の中の水の働きのことなんですけど、私は、ものを溶かし運ぶという働きがあることを書いて、それに体温調節を

することも書いたんだけど、それも書いた方がいいかなって思いました。

この上位の子どもは、児童⑥の下書きのよさを認めながら、水の働きについても書いた方がよいと助言している。これを受け、児童⑥は、友達の下書きのどこにそのことが書いてあるかを確認し、傍線を引いている。しかし、司会者から、友達の発言に対する意見を求められると、次のように答える。

C⑥ よく分からないけど、尿のことが書いてあるからいいかな。尿も水だから、水がないと尿も出なくて、そうすると病気になるから、尿は大切な働きをしている。

二回目の記述に、上位の子どもの意見は生かされていない。児童⑥にとって納得できる意見ではなかったであろう。このように、内容面での変化はほとんどないが、読み合い活動については好意的な感想を述べている。

C⑥ 感想を言うのはちょっと恥ずかしかったけど、言ってもらって楽しかった。作文を読んで、友達が水のことにについて、そう思っているんだなということが分かった。ほくにも分からないことが書いてあつてよかった。また作文を書いて、みんなの読んでみたい。今日は、あんまり言えなかったから。

いろいろな層の子どもと交流するのは、児童⑥にとって、よい学習経験であったことが分かる。また、次の学習への意欲も感じられる。しかし、作文の内容はほとんど変化してない。

一般に、いろいろな層の子どもでグループを組むと、上位や中位の子どもからの指摘により、下位の子どももある程度伸び

ると認識されている。しかし、実際には、グループ間を等質にして相互交流を行っても、下位の子どもが書く作文の質の向上には寄与しないのである。

V 研究の成果と課題

一 研究の成果

実践の分析及び考察から得られたことを基に、成果をまとめてみたい。

本実践は、相互交流のあるなしやグループの組み方の違いが、産出される文章の質に及ぼす影響について明らかにすることを目的とし、三つの学級で授業を行った。

その結果、相互交流のあるなしやグループの組み方、提示する観点によつて違いが見られた。まず、相互交流のあるなしに関しては、下書きを基に相互交流を行った場合に、二回目の記述の質が向上することが分かった。それに対して、相互交流を行わずに、個人で推敲した場合は、内容がほとんど変わらないという結果になった。この結果は、個人の読みだけで書き直すことには限界があることを改めて示すものといえる。

次に、相互交流を行うときのグループの組み方に着目するとグループ間を異質にする方が、グループ間を等質にするよりも全体的に質が向上するという傾向が見られた。また、相互交流を行う際に提示した観点的の違いに着目すると、具体的な観点を与えて話し合う方が、文章の質の向上に寄与することが分かった。

このグループの組み方と提示する観点とを合わせて見たときに、最も顕著な伸びを示したのは、グループ間を異質にし、具体的な観点を提示した上位の層の子どもであった。同じく、グループ間を異質にし、具体的な観点を提示した中位の層の子どももかなりの伸びを示した。それに対して、グループ間を等質にして相互交流を行った組は、具体的な観点を与えた上位と中位の層の子どもにわずかな伸びが見られる程度にとどまった。

いろいろな層の子どもでグループを組んだときに、上位や中位の子どもの指摘を受けることによって、下位の子どもの文章の質が向上すると考えられているが、そのような変化は起こらなかった。

二 今後の課題

子ども一人一人の表現過程を大切に、相互交流の効果を実証的に明らかにすることを試みてきた。今後の課題として、次の三点が挙げられる。

課題の一点目は、どのような項目を設定して、子どもの文章の質を測るかということである。質に関して今回は、その一部分のみを取り出すにとどまった。質を測ること自体、大変難しいことではあるが、書くことの学習において、文章表現の向上は避けて通ることのできない問題である。取り上げる文種や提示する課題に即して、どのような質を想定し、それをどのような項目で測るのがよいのか、検討していかなければならない。

課題の二点目は、相互交流において効果の見られなかった層の子どもに対して、どのような手立てを講じていくかということ

とである。今回の結果からいえば、上位と中位の層の子どもには程度の差はあれ、それぞれ効果が認められた。しかし、グループの組み方や提示した観点の内容にかかわらず、下位の層の子どもには伸びが見られなかった。一人一人の学習を充実したものにするために、そのような層の子どもへの具体的な指導法を開発していかなければならない。

課題の三点目は、対象とする事例とその分析数とを増やすということである。今回は限定された事例に基づき、主に子どもの文章の分析を通して、相互交流のもつ効果を考察してきた。その結果については、研究の成果としてまとめたとおりであるが、どの教室でも同じような結果が得られるとは限らない。学級や児童の特性によっては、当然異なる結果になることも予想される。今回の取り組みは、相互交流の効果を実証的に明らかにするための基礎的な研究の第一歩である。本実践で見いだされた効果について、事例を一つずつ積み重ねる中で、更に検討していく必要がある。

これらの課題は、どれも簡単に解決できるようなことではない。しかし、その一つ一つに取り組むことが、子どもの表現過程をより充実させること、子ども一人一人のよさを伸ばすことにつながる。本研究の成果と課題とを踏まえ、これからも実践を重ねていきたい。

(新潟大学教育人間科学部附属新潟小学校教諭)